

# 産学連携が 将来社会を牽引する



おおく ひとし  
大久保 仁

愛知工業大学／元電気学会会長

わが国の産学連携は将来社会を牽引することができるであろうか？ ここ約 20 年、産学連携の施策がますます多様化し事例としても拡大してきているにもかかわらず、大学の研究成果が社会で実際に十分活用されているとは言いがたい。これまでのわが国の産学連携は、今日の社会を予見し一定の成果を上げてきたことは言うまでもない。しかし、このままで将来社会をリードできるであろうか？ これまで数十年にわたり、産と学に身をおいてきたものとして考えてみたい。

わが国の産学連携における現状を大きく俯瞰すると、わが国の大学がドイツにおけるような産業界と直接的に連携できる素地や構造を築いていないし、またアメリカにおけるような研究開発の自由度と不屈の挑戦意識を育んでこなかったことも事実である。そして学から産へ人材を連携して育成する確固たる信念は、フランスの大学におけるそれに及ばない。さらには英国におけるようなサイエンスに対する実績と誇りは持ち合わせていない。一方、わが国の大学がわが国独自の産・学環境に基づいて確固たる方向付けを推進しているとも思えない。

個別に見ると、昨今のわが国の大学は厳しい現実の競争原理の中で自らの研究遂行能力を削ぎつつある。社会や産業界が期待する将来のビジョンを大学から提供しにくくなっている。これは、研究遂行単位の大学講座の規模が、産業界の研究体制に比して、あるいは諸外国の大学研究体制に比してあまりに矮小で、拡大する社会との共同研究に対等に渡り合えないことにある。このことはさらに大学がリスクの高い挑戦的研究に取り組めない致命的状況を招いている。その上先進諸外国の実情と大きく異なって、わが国では産・学の人事交流がほとんどないことから、産・学を連携する真のリーダーが育たないことであり、産業界から乖離が生じ大学の持つ高いポテンシャルを産業界へとつなげられない。

一方、産業界の状況は、近年、きわめて短期的な成果を追求する経営方針により産業界自身が将来ビジョンを探求し得ない状況が見え隠れする。したがって、大学の成果に期待しない構造が定着し、大学に対する理解が不

十分のまま、大学の有する高いポテンシャル、宝の山を産業界が活用しきれていない。また産学連携はこれまで一過性にとどまることが多く、その持続性、継続性の果たす重要な役割を認識するに至っていない。さらにわが国に起こりがちなことは、産・学ともに責任の所在が曖昧なことであり、すなわち真のリーダーが不在であることである。これらのことが、大学から産業界への人材教育・育成の一貫性がなく、産・学の人材の流れが途切れる一因になっている。このように見るとわが国の産学連携はまだ歴史が浅く、研究と人材育成との一体性、連続性が不十分であり未成熟な過程にとどまっていると言えるだろう。

したがって、これらの課題を克服して 21 世紀をリードする先見的産学連携の研究体制を構築していくためには、産・学の相互依存性を再確認し、人事交流を推進し相互理解を深めることである。その中で大学人の産業界経験を重視するなど、産学研究リーダーの養成を進め、産・学将来ビジョンの発信によりさらなる人材の求心力を高める必要がある。また産学連携の持続性・継続性を重視し、長期計画の中で研究開発と人材育成とを一体として推進する体制が求められる。数 10 年前のアメリカの実例を振り返るまでもなく産業界からその分野が衰弱すると、いずれ大学からその分野が消滅し、以後再興するには深刻な人材欠落に陥るということである。

これからの 21 世紀型グローバルな産業社会において、新しく主流となる科学技術・工学を創成するには、大学と産業界が相互に有機的に連携する相互補完体制が求められる。大学のシーズをキャッチアップした産業界がビジョンを示し、大学がそれに応え、そこに人材が集まる、という循環を作りたい。今後、産・学ともに海外人材や資源を取り入れ持続的に発展していくと思われるが、わが国の大学が産業発展の基盤となることは必須である。グローバルな中でわが国の独自性を有する産学連携を構築し、産・学が築く研究開発ビジョンと人材育成の流れとが一体となり将来社会への牽引力となることが期待される。